

七尾藍佳さん

ななお・あいか●産業能率大学准教授、ジャーナリスト、国際メディアコンサルタント。東京大学教養学部卒業後、日本テレビ系列「News Zero」等でキャスターとして活躍。ブルームバーグ日本支局特派員、NHKワールドレポーターを経て、産業能率大学にて講師を務める。ニュースを斬る鋭い視点に定評が。



YASUYUKI NOJI

七尾藍佳さんがレポート

「みんなでチャリティ」最前線

こちらのページでは、毎回テーマごとに、どのような厳しい現実があるのか？ また、ヴァンサンカンのエレ女が、チャリティ活動にどのように参加できるのか？を探ります。ジャーナリストとして活躍中の知性派エレ女、七尾藍佳さんにレポートしていただきます。

Text: AIKA NANAO

Vol.6 助けを必要としている子ども達

アートの病気の子ども達を笑顔に

「手術を怖がっていた少女が、進んで手術室に入ってしまった」——主に小児病棟にアーティストを派遣し、闘病中の子どもたちに芸術とのふれあいを届けているスマイリングホスピタルジャパン(以下S.H.J.)のイベントでのエピソードです。担当医の配慮から、工作のワークショップに参加してから手術を受ける運びとなったその子は、新聞紙で作ったプリンセスの衣裳のまま、すんなりとオペ室に入ってしまったそうです。

かつて院内学級の教師をしていたS.H.J.創立者の松本恵里さんは、病気の子どもたちの表情が「アート」に触れたときにパッと明るくなるのを見て、この活動を始めました。設立当初はアーティストも限られ、感染のリスクのため、受け入れ病院がなかなか増えませんでした。現在は日赤医療センターなど全国13の病院と7施設で活動し、イベントも年に300回を超えます。新しい病院や施設からのリクエストも増え、毎日のようにアーティストからの応募がある。そんなスマイリングホスピタルの成功の鍵は、「プロによる本物のアート」そして団体名にある「子どもたちもアーティストも笑顔になる」ことだと松本さんは感じています。

「いちばん辛いのは病気を思う自分のはずなのに、子ども達は、僕(私)は家族に迷惑をかけている、と自分を責めます。だから彼らは、お母さんの笑顔に何よりもほっとする。自分よりもまずお母さんに笑って欲しい。普段は子どもの笑顔をほとんど見たことのない親御さんも、自分の子が笑うのが嬉しく、自分も笑顔になる。医師・看護師の方々にとっても、子どもの笑顔が何よりありがたい。この活動を通してみんなが笑顔になれるのです」。

発達障害の早期発見をサポートする

NPO法人発達わんぱく会(以下わんぱく会)は発達障害の幼児に早期療育を提供しています。発達障害



文部科学省により2012年、全国の公立小中学校で約5万人を対象にした調査結果では、「発達障害の可能性のある」とされた児童生徒の割合は6.5%。発達障害をひたくりしてデータを集めている例は世界的に少なく、日本の特徴ともいわれる。Getty Images

害は「人と関わることの困難さ」が共通した特徴とされますが、「人間関係」を育む力は3、4歳ごろまでの幼児期に形成されるからこそ、早期療育が大事です。しかし親御さんにとつて、自分の子に「発達障害の可能性」があることを受け入れるのは簡単ではないと、わんぱく会理事長の小田知宏さんは語ります。「発達障害の幼児には、例えば、抱っこを嫌がる、などの特徴があります。親御さんは子育てで大変さを感じながらも、まだ1、2歳の幼い段階で、診断を受けるとなると大ごと感じられ、専門家に相談する勇気が出せず、一人で悩んでいる方が多いのです。わんぱく会では、保育士や臨床心理士などさまざまな専門領域を持つスタッフが時間をかけて親御さんの気持ちを聞き出しながら、心の準備をサポートしています」。

小田さんは東京大学経済学部を卒業し、商社、介護事業会社を経てわんぱく会を設立、という異色の経歴の持ち主。そんな小田さんは、子どもたちと接するなかで自分自身が「発達障害」を抱えていたことに気づかされました。「私は親や学校の先生などに恵まれたからこそ、集中力などの強みを伸ばしてこまめでやって来ることができたのだと思います」。入会当初はうつむきがちだった子どもたちが、笑顔になるのが何よりの原動力！とまっすぐな瞳で語る小田さんの姿こそ、わんぱく会の活動が、子どもたちの健やかな未来のために欠くことができない証だと感じました。

今月のチャリティ団体

1 NPO法人 スマイリングホスピタルジャパン



Smiling Hospital Japan

闘病中の子どもたちを音楽やアートで元気づける

全国の小児病棟や子どもホスピスなどを訪問し、音楽会やワークショップ、即興演劇、紙芝居などをプロのアーティストが行う。2016年3月で、月間の活動数平均24回、同参加者数延べ平均500名を超えた。登録アーティストは4月現在、80名。「自分の技術で闘病中の子を笑顔にできる、そして子どもたちが大切なことを教えてくれる」と、ほとんどの方がライフワークとして活動を続けている。松本さんは「小児病棟は基本、面会は両親のみなので、閉ざされた世界でもあります。そこで人知れず頑張っている家族のことを伝えるのも、使命のひとつ」と語る。詳しくは、<http://www.smilinghjpj.org/>をご覧ください。

2 NPO法人 発達わんぱく会



Hattatsu Wanpaku Kai

オーダーメイドの療育で子どもの長所をのばす

ひとりひとりの発達段階や状況に合わせ、さまざまな療育方法を用いたオーダーメイドの療育を行っている。音楽やアートで、子どもの認知力、言語力(ことば)、情緒の安定(こころ)、身体機能の向上(からだ)、コミュニケーション力などの発達をバランスよく促す「音と色の療育」のほか、個別療育、グループ療育も。「子どものひらば」では、親御さんが発達障害の早期療育について専門家に気軽に相談できる環境を提供。詳しくは、<http://www.wanpaku.org/>をご覧ください。